Ⅰ　この一年の歩み

１．全体学習

１．はじめに

「先生、同和問題の授業…もう、しとうない。同和問題の授業の時が一番つらい思いをします」「本当の事を言えば先生のことも私は疑っている」という生徒がいる。学年の同和問題意見発表会において胸を張って部落宣言をした生徒が、父母の気持ちについて触れようとしたときには絶句して涙をためた。腹立たしい、くやしい、つらい、やるせない、そんな心の奥にある思いをこの子たちは今までに本当に腹の底から語ることがあったのか。互いに自分の思いをぶつけあうことがあったのか。私たちは残念ながらそのことについて否定的にならざるを得ない。発言の一つ一つが私たちにつき付けられた子供たちの叫びである。地区の生徒が顔を上げ胸を張って受けることのできる授業。地区外の生徒が自分の本音に向き合い、自分の生き方を見つめ直すことのできる授業。そのことを大きな目標の一つに掲げながらの実践であった。

常に体を動かし、考え、生徒と共にありたいと願いつつ実践も、思いばかりが先走っている現状は私たち教師自身の同和問題にかかわる姿勢を問い続けられた日々でもある。この二年間の実践を振り返り、それをまた新しい日々を乗り越えていくための手立ての一つとしたい。そのような思いを込めて学年としての取組みの一端を紹介したい。

２．現状の問題点と実践の方向

同和問題学習が継続していきにくい学校現場の問題点を次のように捉えた。

（１）　同和問題学習に対する取組みの姿勢やレベルが個々の教師によって異なる点がありそれがそのままの状態になっていること。

各学級間の交流や私たち自身の実践について互いに検討がなされることが現実の問題として非常に少ない。そのためある学級においてすばらしい実践が積み重ねらていてもそれが全ての教師はもちろん全生徒の共通の財産になっていきにくという点がある。時間の消化という点においては変わることはなくとも内容においては大きな差があった。全生徒、教師が同一歩調をとりにくい現実である。また、一つの学級を対象にした研究授業にしても成果はそのクラスにのみとどまることが多かったように思う。

（２）　同和問題学習の積み重ね－意識の面においても知的な面においても－が不十分である。

上記の点と共通する。ある学級においてすばらしい実践が一年間継続され、生徒の意識の高揚がみられても学年が変わり新しい学級が編成されたとき、また一

から出直しての授業にならざるを得ないことが多い。結局は最も意識の「低い」生徒に焦点を当た授業からの出発になる。学級毎に取組みの密度が違えばそうなってしまう。同じことの繰返しになることが多く、「また同和の授業か」という生徒の声の出る原因の一つがここにもあるように思う。数学や国語は「積み重ね」の教科であるといわれる。同和問題学習も同じようなことがいえる。少なくとも同じ学年の全ての学級は同一歩調で進まねばならない。

（３）　同和問題学習について教師の取り組む姿勢

同和問題学習は差別を許さない、差別をしない、差別に負けない生徒を育成し社会からの差別の解消を目的とするものである。しかし、そのことを他人ごとと捉える生徒のなんと多いことか。自分には関係ないことと考え建前だけに終始する発言。その原因の一つに「差別」の問題を自分の問題として捉えさせられなかったことがある。多くの資料がある。その資料を読む視点に、「差別を他人事としてしか捉えられない自分の生き方について」という考え方を加えたとき、地区、地区外にかかわりなく自分の問題として考えざるを得ないのではないか。このことは教師にとって同和問題学習が「教える」ことではなく、教師自身が本音を語り自己の差別心を洗っていくという教師自身の問題であるという自覚ににつながるだろう。そのような受け止めをしていくことができているか、ということこそ問われているのだと思われる。

以上のように捉えた問題点を克服するために私たちは学年全生徒を対象とした授業を実践した。学年生徒を体育館に入れ、体育館を一つの教室と考え学年１８５名を構成員とする一つの学級と考えての授業実践である。学年全体を一つの学級と考え、学年所属の教師は全てその学級の直接の担任であると考えれば上記の問題点の解決の道が見出せるのではないか。この学年全体を対象とした授業を「全体学習」と呼ぶこととした。

３．全体学習の実践

（１）全体学習のねらい

学級には学級としてのカラーがあり、それぞれの実態にあわせた実践がある。しかし、私たちの同和問題学習は常に学年全体が同一歩調で歩むことを目指した。それは私たちの問題意識や自覚ーもっといえば解放にかける情熱ーを最も高いレベルにある同僚の位置まで引き上げようとすることであり、全ての生徒を同じ位置まで引き上げようとすることである。また、一人の生徒の悩みや苦しみ、不安を全員が共有していこうとすることであり、教師とてしての苦しみや迷いを分かちあおうとするものでなければならない。

①　教師としての授業姿勢の確立

同和問題は生活の場全てに及ぶ問題である。放課後家庭訪問などで足を運ぶことも多い。しかしそれらは必要条件であっても十分条件ではない。それだけでは同和問題は全体のものになりにくい。授業の場において出される問題点や本音があって初めて同和問題は全体のものになっていく。私たちがしなければならないことは非差別の立場にある生徒への働きかけ以上に地区外の生徒に対する働きかけである。この地区外の生徒に対する働きかけは授業の場が中心にならなければならない。子供たちを変えていく一番大きな力になるのは同級生という仲間の支えである。それを作り上げる授業を組織し実践してこそ初めて教師としての同和問題学習の指導が始まる。そのような授業を教師集団として作り上げることがねらいの一つにある。

担任が自分の学級だけで取り組む授業にはどうしても甘さが出る。切磋琢磨することがない。また、研究授業はその一時間だけの取組みにおわってしまうことが多い。それを越えるために自らを取り組まざるを得ない場に追い込む必要がある。その場をこの全体学習に置いた。

② 生徒の意識を最も高いレベルにまで引き上げること。

一人の発言は学級であれば３７人にしか及ばない。しかし全体学習であれば１８５名全体にその影響をおよぼすことができる。一人の発言が全体を引き上げることにつながるであろう。常に全体を今望みうる最高の水準に置くことができる。同時に高いレベルにおいて各学級の均一化を図ることにつながるであろう。

③ 同和問題学習はまず自分の本音を話すことから始まる。１８５名の中で話していくことは生徒にとって大変な勇気を必要とする。差別解消に向けての実践力が問題になるが今の子供たちにとってそれは自分の思いを全体の中で話し、語っていくしかないのではないか。その自覚が生まれ、発言を支える仲間の存在が確認できたときに初めて全体の場での発言が生まれる。しかし、逆に発言によってそのことをつかんでもいくということもできよう。全体の場で発言させることは全体学習の大きなねらいの一つになった。

④ １８５名全体での同和問題解消へ向けての連帯感を育てていきたい。それは学級が違ってもまったく同じように同和問題について語り合う状況ができることでもある。

（２） 方法と手順

一つの学級の授業を学年の生徒・教師全員が参観し（公開授業）、引き続いてその授業の内容や主題について学年全体で話合いを行う（全体授業）。この二時間連続して体育館で行う授業を全体学習と呼ぶこととした。

① 方法

イ．　公開授業に使われる資料を学年教師全員で検討し、授業者は指導細案－予想される生徒の反応まで期されたもの－を作成する。このとき基本発問を「問い」の形にした生徒用の「学習プリント」も作る。

ロ．　公開授業をする学級以外の学級も公開授業までに授業を行う。その際の指導案は公開授業者の作成したものを使用することを原則とする。

ハ．　公開授業を学年全員で参観する。参観をする他の学級の生徒は資料、メモを用意する。

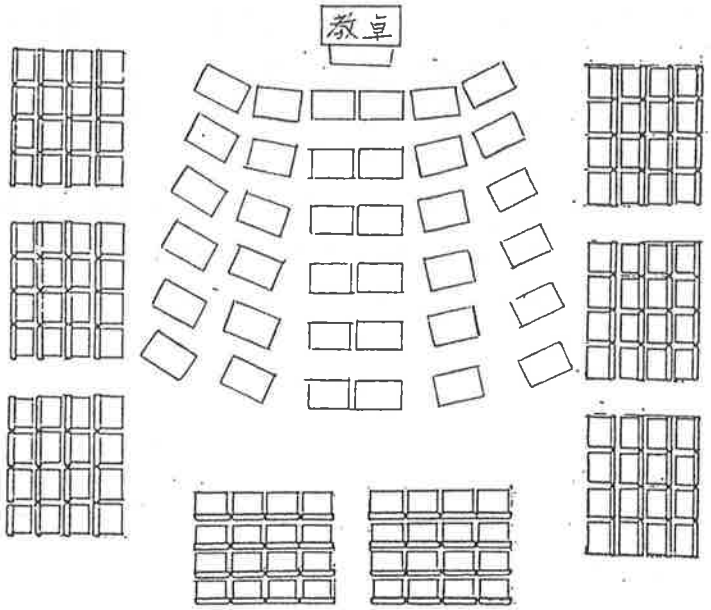
ニ．　公開授業終了後１０分間の休憩の後全体授業に移る。この際の授業者は公開授業の指導者とは異なるようにすることを原則とした。また、私たち自身の研修のためにも授業はビデオにとることにした。さらに授業記録を授業者の手で作成し後日の研究会に備えた。

ホ．　全体授業においては指導案を作成せず、まず公開授業の話合い活動や形式面についての生徒の意見を求めその後内容についての授業を全体で行うようにした。授業者の判断で公開授業において問題として残された点や深まりが不十分であったと思われる点について授業者の判断で授業を進めるようにした。

ヘ．　授業後各学級で短学活の時間を利用して５００字前後の授業の感想や資料を通しての自分の思いを綴り提出させる。

ト．　それらの思いや感想の中で考えさせられるものや再び生徒に投げ返し一層深めることのできるものについては学年通信「ねんりん」に掲載し学級での話合いの資料とすると同時に家庭での話合いの材料ともした。

②　全体学習の隊形



（３）　全体学習の実際

①　昨年度からの二年間で各クラス３回、計１５回の全体学習を実施した。指導細案、授業記録のすべてを掲げる余裕がないため資料名を揚げると次の通りである。（授業実践編において授業記録の一部を掲載する）

平成２年度

・渋染一揆　・夕焼けが美しい　・ミナコ逃げるな　・私の目を見て

・人間に光あれ

平成３年度

・娘の遺してくれたもの　・人の値打ち　・傷跡　・Ａ子の場合

・同和教育の希い　・私は負けない

②　全体学習の推移と生徒の意識の変化

最初の三回の授業は形ばかりに終始した全体学習であった。生徒の発言は前もって用意された学習プリントを読むことが多く、初めての経験から来る緊張感もあり建前の発言が続く。まだ全体学習の意味やあり方を生徒も私たちもつかめていない状態であった。

そのような全体学習に「魂」を入れたのはＢ先生の怒りであった。そしてＫ子が涙を見せた。これがそれ迄の全体学習を質的に大きく変換させていくきっかけになった。今もこれまでの取組みを振り返るときこの授業をあげる生徒が多い。生徒がゆれだした。建前に始まり建前に終わっていた生徒の発言に本音が入っていくようになる。今年度になって火が付いたようになった。自分の本音を切々と生徒に語りかけていった先生がいる。それによって貫かれるような衝撃を受け、立ち上がろうとする生徒。その生徒によって自分を見つめ苦しい思いの中から頑張った先生たち。私たちはこのような互いが互いを支え磨き合うような中で変わってきたといえる。自分の両親の差別心を全体の前で苦しそうに話す生徒がいる。見えてなかった差別が初めて見えだし震えるような怒りを覚えた生徒。ゆれながらも部落出身であることを語る生徒が出るようになっていた。それらが各クラスの同和問題学習のレベルを引上げることになり、またそれが全体学習を引き上げるという良き循環を繰り返したように思う。

学年としての一つのまとまりと連帯感が感じられるようになってくる。

４．全体学習を終えて

（１）生徒の感想から

・　この頃全体学習で同和問題学習が段々エスカレートしているように思える。

特にＢ組みのＩさんなんか堂々と胸張って発表しているように思うし、みんなの発表が話合いに変わってきている。それだけみんな心を開いて、みんなを信じることができるようになってきているから次々に手を挙げることができるのだと思う。こんなに熱くなって発表したいと心から思ったことはなかった。

・　弱い心に負けそうになったときはここに戻ってくればいいと思う。そしたらまた闘う力が出て来ると思う。そんな心の支えを見つけるためにも。この授業をやっている理由の一つだと思う。だから残りの３か月を一生懸命頑張りたい。私は自分が傷付くよりも他人を傷つけることを恐れるような人間になりたい。そういう友達関係でなくてはならないと思った。

・　これだけ同和問題学習に真剣に取り組んだことは初めてです。全体で取り組んだことでどれだけ必至になったことか。やっぱり言葉だけの形で残すのはいけない。当たり前の子とだけど、もっともっと堂々と行動に表したい。

・　二年の時から続けてきた全体学習で自分なりに大きく心が変わっていきました。本音をみんなの前で堂々と語ったとき初めて全体学習をしてきてよかったと思いました。二年生で初めてしたときいつまでこんなことをするのだろう、やりたくないなと毎時間のように心の中でつぶやいていました。そしてきれいごとを言っては本当の自分を隠し続けてきたようなそんな情けない自分でした。今まで私は何をしてきたんだろうかと自分で自分を叱りつけるように考えることもできました。

・　二年間全体学習をしてきて私にとって一番変わったことは、なんか同和問題について普段の会話でいろいろ話せるようになったことです。Ａさんとも自分の考えていることを言い合う子とができます。

・　二年生の時から全体学習に取り組んできました。初めの頃はとてもつらくていつもさぼって一生懸命になっていませんでした。でも、Ｍさん、Ｙさん、Ｓさんがすごく真剣で涙を流した日から何かがはじけました。みんなの本当の気持ちを聞くことができ団結力みたいなものも伝わってきた全体学習を無駄にしたくないのです。

（２）　全体学習の成果

①　全体学習は同和問題たいしての意識の変容に大きな力となった。それは全体で取り組むことによる連帯感の芽生えとあいまったものである。学級単位の取組みであればここまでの盛り上がりはなかった。「みんなでやっていく」ことの意味は、中学生にとっては我々教師が考える以上に大きい。

②　どの学級も同じレベルで同和問題を考えていくための力となった。「学級一全体」のサイクルはすべての学級が同和問題については同じ内容について

同じレベルで考えることにつながる。一人の問題が１８５名全員の問題となり、一人の問題提起が全体をゆり動かすことになっていった。どの学級であっても日常会話の形で同和問題について話すことができるようになる。

③　全体の場で発言することの意味は大きい。今の生徒にとって同和問題にかける実践とは自分の考えを発表し、発表する中で何度も何度も考えていくしかない。全体の場での発言は生徒にとっては生徒なりに責任を伴うものである。そういう自覚が生まれ、発言がある。全体授業を通して多くの部落宣言があった。個人的に部落出身であることを打ち明けられた生徒がいた。私たちも生徒も「信頼」「仲間」という言葉の重みとそれに伴う苦しさをつかんでいった。自分自身の問題として考えざるを得ない状況はそうした中から生まれつつある。

④　地区外の生徒についていえば「差別する側」にいた自分を自覚しその差別心を洗おうとする姿勢が生まれつつある。多くの地区外の生徒が絶句し涙を流す姿が見られた。「私が部落出身じゃないからこの学習に本気になってないなどと思われたらくやしい。部落出身の友達のためにやっているんじゃない。自分のために取り組んでいるのです」という発言がある。

⑤　全体学習を生徒間の話合いに留めず教師自らも参加していくことによって、教師・生徒が一体となった学習を展開することができる。私たちは教師としてという以前に一人の人間として生徒の前に立ち話していくことの大切さと苦しさをつかむことができた。「今日全体学習の時Ｃ先生が自分の本当の気持ちをいってくれたことが本当にうれしかった。先生たちも頑張ってください。お願いします。私たちももっともっと頑張らなくてはいけないと思います。先生に負けていられないからね」という生徒の言葉がある。

⑥　上記と重なることにもなるが、二年から３年への進級、組替えによる停滞がまったくなかったことがある。新しいクラスすべてが前年度の実践の上にたった同和問題学習を展開することができたことはこの取組みの大きな成果の一つと考えている。このことは同和問題学習の継続性を示すものであり、担任の取組みが同じ歩調であったことを示すものであると考えることができる。

⑦　しかし、それは各クラスの独自性を失うものではない。個々の問題については担任の力によらねばならないし、事実学級独自のカラーはある意味では鮮明になっていき、生徒と共に考え苦しむ姿があった。しかし、全体授業に取り組む中で基本的な構えや姿勢は共通なものとなり、根本的なところにおいて共通の思いが存在した。従って、あるクラスの一人の生徒の問題が常に全教員の問題となり共通の課題となっていった。

⑧　私たちにとっても全体授業は苦しいが大きな力になっていった。一人の担任の公開授業に続いて全体授業があるため、すべての授業を自分の研究授業と同じものとして取り組まざるを得ない。常に資料についての検討・話合いがあり、生徒の実態について意見の交換がなされた。

丸岡さんの「ふるさと」に取り組もうとした。よくわからない点がある。そうしているときＢ先生よりそのバックになる丸岡さんの講演記録「同和教育への希い」の存在を教えてもらう。みんなでそれを読むがまだわからない点がある。そこから「怒りの砂」を学習していくことにつながていった。私たちの学習はこのように進んでいった。全体学習がなければここまでの取組みができたかどうか疑問である。全体学習は生徒に教えられる形ですすんでいった部分も多い。

（３）今後課題

①　全体学習の大きな特徴は、それが学習オリエンテーションでも「集会」でもなく生徒による授業の参観から始まることにある。他の学級の授業を通して友達や先生の考え・思いをつかみ自分の考えを深めていくことにあるが、さらに「生徒による授業参観」の効果を考えていきたい。生徒に授業を参観させることの意味は何なのか。後に続く全体学習とどう関連づけられるのか。その点で十分な検討がなされていない。そのために、全体授業の指導が指導者のその時の感覚に任されてしまったことがある。全体授業は指導案を作成せずに臨んだがそのことの是非も結局は全体授業の正確を明確にするところから導かれることであろう。

②　同和教育はほとんどの場合地区の子が苦しい思いを出していかなければ始まっていかないという現実がある。私たちの実践もその通りであった。全体学習が今のような質を持つようになったのは一人の地区の子の涙からであった。それを乗り越えていくための教材の発掘や作成、授業に臨む姿勢を問い続ける必要がある。

③　全体学習は生まれたばかりである。この形を継続し一般化していくためには少なくとも年間の大まかな計画は必要であろう。全教師の共通理解のもと、より効果的な全体学習の運営方法や在り方を考えていきたいと思う。